

子は何處から出たといふと、矢張り興福寺の野見宿禰當麻蹴速から出た、先づ是で置きます。(拍手)(十月四日本校設置
記念日講演筆記)

『東京美術学校校友会月報』第十八巻第五号。大正八年十月



岡倉覚三

岡倉覚三は上述の美術局設立運動を開始した明治十七年にはまだ二十二歳であったが、今泉雄作にさえこれほど才能ある者は少ないといわせるほどの鮮やかな手腕を既に発揮し始めていた。それが九鬼隆一や浜尾新に重用された所以であったといえよう。経歴を振り返ってみると、彼は文久二年(一八六二)に生まれ、横浜で育った。

父は旧福井藩士で、万延元年(一八六〇)藩の横浜商館手代となつて横浜に移住し、明治七年以降は東京で宿屋兼越前物産取次所を営んだ。覚三は八歳から英語を習い始め、東京外国語学校下等一級、東京開成学校(校長浜尾新)を経て東京大学文学部に進み、明治十三年七月に卒業した。在学中にはフェノロサの講義を受けた。卒業論文は「国家論」であったが、妻と痴話喧嘩して焼かれてしまい、急拠「美術論」を書いて出したという。ほかに、漢詩を森春濤に学び、奥原晴湖に南画を学び、また、琴を加藤桜老に習ったともいわれる。東大卒業後間もなく文部省御用掛となり(同年十月)、音楽取調掛(明治十二年設置)勤務を命ぜられ、お雇い外国人メーンソン(Mr.

ter Whiting Mason 1828~97)の通訳その他の事務に従事したが、掛長伊沢修二(嘉永四年~大正六年)と意見が合わず、同十五年に専門事務局勤務内記課兼務へと転じている。

明治十七年に至つて岡倉は美術局設立運動に着手する一方で、龍池会に入会し(録事となる)、鑑画会の結成に参加し、文部官僚として古社寺調査に出張し、また、図画教育国風化を目的として図画調査会の進行に尽くすなど、行動が急に活発になる。そうした行動の支えとなつたのは文部少輔九鬼隆一であったと考えられる。

九鬼隆一は明治五年から文部省に入り、翌六年欧米に出張し、以後、文部少丞、文部大丞、文部大書記官を歴任した。同十一年にはパリ万国博に派遣され、任務終了後、各国の教育、美術等の状況を視察して帰国した。その後文部少輔となり、明治十七年九月に特命全権公使として渡米。帰国後、宮内省図書頭となり、博物館(當時は宮内省所属)の拡充、臨時全国宝物取調局設置等、古美術保護行政の推進に努め、明治二十三年に至つて我が国における近代的博物館の創始である帝國博物館の設立を実現させ、その総長に就任。岡倉は同館理事(美術部長)に抜擢される。

九鬼と岡倉との接触は、明治十五年、文部少輔の九鬼が学事巡視を行った際であろう。この時、岡倉も随行して新潟、石川県方面を巡り、帰路には京畿方面の古社寺を訪ねている。九鬼は当時から古美術保護について期するところがあつたといわれる。明治十七年二月には、九鬼は再び学事視察(長崎、佐賀)に赴いたが、この時も岡倉が随行した。このようなことから岡倉は九鬼と親密になり、九鬼の片腕として古美術保護行政を推進してゆくことになるのである。

る。

もっとも岡倉の場合、九鬼と接触する以前に、大学の恩師フェノロサから古美術に接する機会を与えられていた。フェノロサは明治十三年以降毎年の夏休みに関西へ行き、古美術品の見学や収集を行ったが、その最初の旅行のとき、大学を卒業したばかりの岡倉を通訳として同伴（ほかに狩野友信、住吉広賢らも同行）したのである。日本美術史を本格的に研究し始めた師のもとで、岡倉もまた勉強を始めたのであった。そして、そこに胚胎した日本美術復興の夢が、彼をして美術局設立運動へ走らせたものと思われる。

明治十七年の古社寺調査

明治十七年六月下旬から九月中旬にかけて、フェノロサ、岡倉寛三らは京都、奈良方面の主な古社寺の宝物調査を行った。ビゲロウ、柏木貨一郎、安藤広近らが一行に加わり、奈良では加納鉄哉も加わったようである。フェノロサは、個人的にはこの種の旅行を毎年行っていたが、今回は文部省が岡倉の派遣というかたちで力を借していたので、かつて無く徹底した調査となった。フェノロサのモース宛書簡にはこの調査のことが次のように記されている。

拝啓 この夏は大変でした。二ヶ月半の間博士―ビゲロウと一緒に文部省の役人を伴って出かけておりました。文部省は私に随行して美術調査に従事させるよう特別な任務を課して役人を派遣したのです。私たちは政府の書状や命令書を携行し、山

城・大和の主要な古社寺は片端から回って来ました。あるいは土蔵の隅々をほじくり、また千三百年前に建てられた塔の最上層で、積み重なった残骸の一番底から何体かの影像を掘り出したのです。言うなれば日本の中心的社寺に所蔵される偉大な美術文化財の、最初の正確なリストを作ったわけです。私たちは長い間これら個々の作品にまつわりついていた伝承を覆えしました。博士は二百枚の写真を撮り、私は絵画彫刻作品のスケッチを数えきれぬほど描きました。今までまったく埋もれていた六世紀から九世紀までの日本美術の歴史を再現し得たのは何よりのことでした。かつて人の目に触れたことのない多くの作品を比較研究し、それに基づいて立てた一連の綿密な推論によるものです。どこへ行っても寺僧たちは私の鑑定状を欲しがります。私は今まで皆目伝来の不明だった作品について鑑定状を百枚以上も発行しました。実は中国のものが日本の制作と考えられていたり、あるいはその逆だったり、日本のものでも多くが朝鮮作と考えられていたり、また新しいものが古いとされていたり古いものでもなかには新しいと思われるものがあつたり、個々の制作者の名前に至っては目茶苦茶に混同されていることがわかりました。しかしこれが、何百年にもわたる伝承の結果なのです。もちろん私の見解に疑いを持ち、どうしても信用しない旧弊な老人も何人かいることは当然です。私は彼らが宝物だと考えているものの中に比較的無価値なもののあることを立証し、未知の穴蔵から真の寶石を発掘しようと思つています。ところで重要なことは、そういう目的で私がこの夏の旅行